
赤い花・青い花

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い花・青い花

【Zコード】

Z0814M

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

仲間内、という関係で酒を飲んでいた。

お互にその気になれなかつた人を振つてしまつた夜に、酔つ払つてなんとなくお互いを意識した。

一度寝たからとつて、恋人同士になるわけではない。

そんな言い訳をしながら。

シャワーを浴びる彼女の水音を聞いている。

生まれて四度目抱いたのは、今まで一番上手い女だった。

その日、俺も彼女も仲間内の奴等から想いを告げられ、それぞれ相手を振ってしまったという夜だった。自分の気持ちが動かないのだから仕方のない事なのだが、どうも人を傷付けたという出来事は後味が悪くていけない。他の仲間と冷蔵庫で眠っていたスパークリングワインだの部屋に転がっていた日本酒だのを飲んでいたのだけれど、気がつくと彼女だけが部屋に残っていた。俺は随分と飲んでしまっているようだつた。

「他の奴等は？」

「帰つたじやない、玄関で転んだわたしをあなたが部屋に連れ戻しちゃつたのよ、覚えてないの？」

ええつと、と言葉を濁してから田の前にあつたコップに入つてゐる紫色の液体を手に取る。しげぱんの絵がついたグラス。確か去年あたりにゲーセンで取つた。

「あきれた」

ちつとも呆れていらない顔でそう言つと、彼女も同じように机の上にあつたワインに口をつける。飲めないはずだと気付いたのは、彼女の体内に液体が半分以上消えてからだつた。

「飲んでる」

「飲んでるわよ、なに、どうしたの」

「いや、ワイン嫌いなんじやなかつたつけ」

残りをぐつと飲み干して、彼女は勢いのままコップを置いた。タン、といい音がする。まるで葡萄ジュースを飲むようだ。

「嫌いよ、酸っぱくて甘苦くて、吐きそうになるもの、美味しいくな
いし」

「なんで、じやあ飲んでるんだよ」

「出されたものに文句を言つるのは失礼じやないの」

今度は本当に呆れた顔をして、彼女は俺の顔をじっと見た。細い目、いつもすぐに酔つて縁を赤くしているのに、なぜだか今日はやたらと白い顔をつるりとさせている。

「誰かを振つたって？」

「ああ？」

「噂よ、噂。随分大人しい娘を泣かせたのね」

「それならお前こそ、噂を聞いたぞなかなかいい男を振つたらしくな」

「いい男？」と彼女が眉を釣り上げた。もちろんそんなのただの嫌味だ、少なくとも俺よりいい男じゃない、俺より背が高いだけだ。

「あんなみみつちくて女々しい男、嫌だわ、わたしの身体にすぐ触れたがるんだもの、しかもわたしが誘つたかのように吹聴するの、最悪」

「俺だつて、ああいうお嬢様は駄目なんだよ、すぐ嫉妬したり泣いたり恋愛よりも友情が大事だつて場合があるのを理解してくれないようなね」

「……あんなお嬢様が好きなのかと思つてたわ」

彼女は黒目を上方へぐるりと動かし、何かを想像している顔をした。きっと俺が振つた女の顔を思い出しているのだろう。目がかくて、福の神みたいに縁起の良さそうな笑顔を絶やさない、幼稚園の先生をしている女の子を。

「お前、触られるの好きじやん」

俺も彼女が振つた男を思い出してみる。黙つていればナントカつてバンドのやたらと切ない声をしたボーカルに似ていなくもないような気がする、細く白い男。確かに、むつりっぽいけれど。

「冗談じやない、わたしが触られたいのはわたしが好きな人間にだけだわ」

「あいつは嫌いなのか」

「興味がないだけだつたけど今は嫌い、わたしの気を引くために他人の悪口言つ男よ」

「そりゃ最低だ」

「でしょ、最低、もう近寄りたくない」

ワインのなくなつたグラスに指を這わせて、彼女はマシンガンのように早口で喋ると、俺を見てにっこり笑つた。正直な話、俺も彼女も顔の造りはそんなに丁寧じやない。人から好かれてしまつのは、彼女は自分の肉体をあまりにも簡単に他人へ放り投げてしまつし、俺は変なところで優しくない優しさをだらだらと吐き出してしまつからなのだろう。だから変な奴にばかり好かれてしまうのだと思う。すれば、自分の好みではない奴にばかり好かれてしまうのだと思う。もちろん、自分の好みの相手だつてちゃんと手に入れたりする時期はあるのだけれど。

「なんだよ」

「ううん、あんまり可愛い顔してると襲ひやうつて、言おうと思つて」

「は、俺が？ 可愛い顔してた？」

「冗談じやない、と今度は俺が言つた。」

「なんだい、そりゃ」

もしかしてお前、俺が好きなのか、と聞くと、まさか、と彼女は笑つた。

「あんたみたいに誰にでも優しい男、嫌いよ」

「言われ様だな」

「甘やかしてあげるから、黙つて抱かれない？」

「なんだお前、発情期か」

「発情期のわたしだつたら、有無を言わさずズボン下ろすぐらいするわ」

恐い女、と言つたら、彼女は鼻で笑つた。今ごろ知つたの、駄目ね女に騙されるタイプよ、と。

彼女が座つていた俺の膝の間に手をついた。ぐ、と身体が近づけられる。柔らかな汗が匂う。茶色い髪からは花のよつた匂いがした。大胆なくせに中途半端に恥じらう頬が染まつてゐる。もっと酔わせ

てあげれば良かつたんだ、と意味のない反省をした。そしたうりすやんと俺を襲えただろうに、酔いのせいにして。

「抱くつて？ セックス？」

「違うわよ、抱きしめる方、抱つ！」

「そんなんで満足する？」

するわよ、人をなんだと思つてゐるのかしらみんなして、と彼女はどちらかといえбаいつも細められている目に真剣な光を反射させ、そのやや茶色い瞳に俺を映した。唇が降りてくる。それは、俺の頬を、瞼を、額を、顎を、頸を、ランダムに突付いて触れて離れた。いつ唇にこいつのそれが重なるのだろうと思つていてただのけれど、彼女にその気はないようだつた。触れるだけのくすぐつたさに、俺は目を閉じてじつと我慢する。彼女の舌が耳を撫でても、首筋をなぞつても。

うふふふふ、と彼女が笑みを漏らす。頬に何度もかの感触。樂しいのかと聞くと、もちろん、と返つてきた。そんな事がしたかつたのか、と重ねて聞くと、ほんの少しの沈黙の後、意味ありげに曖昧な返事。さあ、と軽い声が耳に滑り込む。

「ちょっと待てよ、理性が飛んだらヤバイだろ」

俺は彼女を引き剥がすと、乾きはじめていた喉に彼女の嫌いな液体を注いだ。紫色のアルコールを飲み 干す間、彼女の横顔をそつと見詰める。

遊びはこれで終わりだと勘違いしている顔。

ああ、楽しかつた、と満足げなため息を吐きそなその顔に。

「おい、」

声をかけた。

振り向く白い顎が、日に焼き付いた。ぽつてりと赤い唇。

「仲間内でこいつのつて、後が面倒だろ、駄目だ、お前は好きだけど、そういう対象じゃない」

「……知つてるわよ、え、何……」

俺の事を嘘吐きだと、彼女は思つただろう。

俺だつて思つた。俺は嘔吐きだと。ひとつ言わせてもらえば、もてない訳じやないけれど俺は付き合つた女以外とはセックスをしない主義だつた。据膳は食わない。鈍感な男といわれてもいい、そういうのには気付かない振りをずっとしてきた。

どうしてこの女だけ、キスしてもいいと思つてしまつたのだろう。どうしてこの女だけ、付き合つてもいいのに抱いてもいいかと思つたのだろう。

「抱いたからつて、明日から付き合つう訳じやない」

言い訳は誰の為のものなのか、口にした俺にさえさつぱり分からなかつた。もしかしたら、過去の恋人たちへのものだつたかもしないし、振つてしまつた女に對してのものだつたかもしないし、彼女へのものだつたかもしない。すべてである可能性だつてあつた。俺の為でももちろんあつた。

そんなの知つてゐるわ、と、彼女の唇が動いたかどうかは知らない。確認する間はなかつた。俺が、自分のそれを重ねてしまつたから。彼女はすごく驚いたんだろう、身体がそのまま固まつた。俺も出来るなら固まりたかつた。なにしてんだよ、という自分の笑い声が頭の中にガンガンと響く。おい、なにを手^レ出してんだ、後々面倒に事になつたらどうすんだよ、そんな声が、頭の中でぐるんぐるん回つた。

それでもまあいいや、と思つたのは、彼女の唇があまりに柔らかくて、そしてちよつとしたらきちんと意識を正常位置に戻した彼女がそのなかなか上手な舌使いで俺のくちづけに答へはじめたからだつた。

途中からは夢中。

電気の眩しさだけが瞼をさして、邪魔だつたから少し唇を離して電気を消した。その時の切なさときたら。前の恋人と別れてから一年経つていた。そんなにも長い間キスなんてしていなくて、だからそういう行為に飢えていたんだと知つた時の軽いよろめき。

「……あいつに触られるのは嫌でも、俺ならいいのか」

「嫌だ、こんな時になんな顔思い出させないでよ」

静かに笑つて、彼女は俺の首へ鼻を埋めた。繰り返される、肌を探る舌先の濡れた感触。俺も、と彼女を押さえつけようとしたらするつと逃げられた。

「なんだよ、」

「駄目よ、わたし汗かいているもの」

「俺だつて」

「あなたはいいのよ、別に」

彼女の目がいつもの細められた目に戻っていた。この女、俺を好きなんじゃないかと、結構本氣で思った。うぬぼれだらうか。

「なら、シャワーを使えばいい」

なんなら一緒に入つてもいい、とからかえれば、真剣な声で、馬鹿、と声が返つてくる。

「……なにしてんだる、な」

「考え方駄目なのよ、そういう事は」

「虚しい行為だと気付くから?..」

「本気で欲しくなつたら奪いに行くべから」この勇氣はあるわよ

「それ、俺の事?」

「身体から始まる関係なんて信じていないんでしょ」

正直に言えば、と俺は正直に答えた。身体から始まる関係つていのは、他の奴は知らない、でも俺にとつては一番欲しい行為を与えられてしまつている状態な訳であつて、それ以上付き合つなんていう苦労をしてまで相手の女を欲しがるかどうか、自信がない。

身体の相性がものすごく絶妙で、こいつしかいないと思つたんなら別としても。

「シャワー、浴びたら引き返せなくなるわ」

「理性飛ばせば」

「明日からまたお友達でいられるかしら」

「努力する」

「自信はないのね、そんな言葉が出て来るつて事は」

艶やかに微笑んで、彼女は立上がる。その中間でキス。甘い唇、あなたの味ならワインも嫌いじゃないわ、とそつと囁かれた。その時に背筋を走った電気。

紺色のバスタオルを指差す。客用だから、と言つと、彼女はもう一度俺にくちづけた。柔らかな舌。奥まで入り込んで、俺の魂を搔き出そうとする動き。ジャージのズボンですらきついくらいだった。早く抱きたくて。

「恥かしいから覗いちゃ駄目」

するりとバスルームに消える背中、俺が今まで愛してきた女達とはタイプの違う彼女。俺はこげばんのコップにワインを注ぐ。

やがて流れてきた水音に、合せてそれを口に運んだ。

身体から始まる関係、彼女はそれを信じているのだろうか。

これから行為を考えて、ソファに敷いてあつた布を床に広げた。

彼女は、どんな声で鳴くのだろう。俺の下で。

早く出てくればいいのに、と思つて、すぐに反対の事も思つた。ずっと出てこなればいいと。酔つて転んでばかりいる彼女の身体には、青痣の花が咲いているだろう。そこに、俺のキスマーカで咲く赤い花を残してやろうと思つた。実際はどうなるか分からぬけれど。早く出てくればいいのに。ずっと出てこなればいいのに。俺は少し混乱していく、そしてゆるやかに、明けてゆく空を考えた。

終わつて彼女がこの部屋を出て行く時、きっと俺は寂しいんだろうな、と思つた自分に驚いて、そして彼女の白い身体だけをずっと想像していた。水音が聞こえる。彼女の背を、俺の指のようすべる、水音。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814m/>

赤い花・青い花

2010年10月8日14時38分発行